

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K09203

研究課題名(和文) 高齢期におけるライフイベントのメンタルヘルスおよび外出頻度への影響に関する研究

研究課題名(英文) The Effects of Negative Life Events on Mental Health and Frequency of Going Out in Elderly People.

研究代表者

藤田 幸司 (Fujita, Koji)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：40463806

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、要介護リスクである高齢者の閉じこもり発生の予測因子としてのネガティブ・ライフイベント(以下、NLE)、および抑うつ傾向について検討することを目的とした。コホート調査を実施し多変量解析を行った結果、2年後の閉じこもり発生の予測因子として有意であったのは「抑うつ傾向」のみであり、NLE5項目(身近な人を亡くした、自身の大きな病気やけが、家族の大きな病気やけが、経済的に厳しい状況になった、自身の役割が無くなった)は、全て有意ではなかった。抑うつ傾向の高齢者は閉じこもりになりやすく、予測因子であることが示唆されたが、高齢期のNLEについてはさらなる研究が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢期におけるNLEが、メンタルヘルスの悪化や閉じこもりのリスク要因であるという因果関係を明らかにすることにより、NLE発生に対する心理的サポートをはじめとする支援の有効性について検討することが可能である。早期支援によってメンタルヘルスが改善されることにより、高齢者の孤独や社会的孤立、閉じこもりを防ぎ、ひいては介護予防に繋がることが期待される。本研究で調査したNLE5項目(喪失体験)は、2年後の抑うつ、閉じこもりの発生の予測因子であることは明らかに出来なかったものの、さらなる追跡検討が今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to examine negative life events (NLEs) and depressive tendencies as predictors of decrease frequency of going out (i.e. homebound), which is a risk for long-term frailty in older adults. The results of the multivariate analysis of the cohort survey showed that the only significant predictor of the occurrence of homebound two years later was "depressive tendency," while the five NLEs 1) loss of a close relative, 2) major illness or injury in oneself, 3) major illness or injury in a family member, 4) financial difficulties, and 5) loss of one's role were not significant statistically. Although the results suggest that depressed older adults are more likely to be homebound, further research is needed on NLE in old age.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：ネガティブ・ライフイベント 閉じこもり 抑うつ 喪失 介護予防 高齢者保健 外出頻度 社会的フレイル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2005年度介護保険法改正では、予防重視型システムへの転換、つまり「介護予防」に重点が置かれた。厚生労働省は高齢者における要介護リスクとして、運動器の低下、口腔機能の低下、低栄養、閉じこもり、認知症、うつなど6つの分野が取り上げ、これらに対する介護予防プログラムを介護予防の重要な対策とした。なかでも、高齢者の閉じこもりが要介護のリスク要因であることは、国内外の研究によって、エビデンスが蓄積されてきた。しかしながら、閉じこもり状態にある高齢者は、外出しないことから、通所型の介護予防プログラムへの参加が少ないために、介入や対策が困難である。したがって、閉じこもりについては、高齢者が閉じこもりの状態にならないような予防的対策が重要である。

高齢者は疾病や老化による身体的機能の低下だけではなく、さまざまな心理・社会的要因によって、メンタルヘルスが悪化しやすく、特に抑うつ傾向やうつ病などの精神障害は閉じこもりにつながりやすい。したがって、高齢者のメンタルヘルスがどれくらい閉じこもりのリスクを高めるのかを明らかにすることは、介護予防の面からも極めて重要である。

高齢者は加齢に伴う身体機能の低下や慢性疾患への罹患、複数の疾患・傷害の併存(Comorbidity)、体力・移動能力・生活機能の低下といった身体的な問題を抱えることが多くなることがストレス要因となる。また、高齢期は衰退と喪失の時期であり、種々の喪失体験を比較的短期間に経験する者が多く、それらは高齢者にとって乗り越えなければならない心理的危機となる。身近な人の喪失・死別、退職や子どもの自立による社会的役割の喪失、身体機能の低下など健康の喪失など、高齢者の生活におけるさまざまな喪失や出来事によって、日常の行動や交流範囲、およびネットワークが縮小し、不安が惹起される。

このような高齢期におけるネガティブ・ライフイベント(Negative Life Events, 以下 NLE と略す)が、メンタルヘルスおよび外出頻度に及ぼす影響について、縦断的研究によって明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

高齢期における NLE が、メンタルヘルスの悪化や外出頻度の低下(閉じこもり)のリスク要因であるという因果関係を明らかにすることにより、NLE 発生に対する心理的サポートをはじめとする支援の有効性について検討することが可能であり、早期支援によってメンタルヘルスが改善されることにより、高齢者が孤立、孤独、閉じこもりを防ぎ、ひいては介護予防に繋がると考えられる。

本研究は、高齢期における NLE の、メンタルヘルスおよび外出頻度に及ぼす影響について、縦断研究によって明らかにし、高齢者の閉じこもり予防、介護予防に活用することを目的とする。

3. 研究の方法

1) 2018年4月~6月に、秋田県 A 町(高齢化率 42.0%)内の B 地区に居住する 65 歳以上 95 歳未満の 2373 人のうち、施設入所者を除く 2273 人を対象に自記式質問紙調査を実施し、1367 人から有効回答を得た(60.1%)。調査は健康推進委員による配布、回収は郵送(一部、保健センター持参及び健康推進委員による回収)によって実施した。性別、年齢、メンタルヘルス(K6)、外出頻度、NLE5 項目(身近な人を亡くした、自身の大きな病気やけが、家族の大きな病気やけが、経済的に厳しい状況になった、自身の役割が無くなった)を用いて解析した。メンタルヘルスは K6 質問票により測定評価し、9 点以上を「抑うつ傾向あり」とした。NLE とメンタルヘルス、外出頻度との関連についてカイ二乗検定を行なった。

2) 秋田県 A 町 B 地区において、65 歳以上 95 歳未満 2273 人を対象に実施した初回調査に回答した在宅高齢者 1,322 人(要介護 3~5 を除く)のうち、死亡 28 人、介護施設入所 3 人、転出 1 人を除く 1,291 人を対象に追跡調査を 2020 年 4 月に実施した。調査は健康推進委員による配布、回収は郵送によって実施し、1,050 人から回答を得られた(回収率 81.3%)。初回調査時に閉じこもり(外出頻度が週 1 回以下)およびデータに不備があった 223 人を除く 790 人について、高齢期における NLE の、メンタルヘルスおよび外出頻度に及ぼす影響を明らかにする目的で分析を行った。追跡調査時の閉じこもりの有無を従属変数に、初回調査時の性、年齢、同居者の有無、NLE5 項目(身近な人の喪失、自身の病気やけが、家族の病気やけが、経済的に厳しい状況になった、役割の喪失)抑うつ傾向(K6)健康度自己評価を説明変数とした多重ロジスティック回帰分析を実施した。本研究の実施にあたっては、文京学院大学倫理委員会の承認を得た。

4. 研究成果

1) 分析の結果、最近 1 年間の身近な人の喪失については、「とても辛く将来に希望を持ってない」群は、「辛かったが元気を取り戻しつつある」群、「死を受けとめ、普通の日常生活を送っている」群と比較して、ほぼ毎日外出している割合が低かったものの、統計学的に有意な差は認められなかった。自身の大きな病気やけがについては有意差が認められたが、家族の病気やけが、経済的に厳しい状況になった、役割の喪失については外出頻度と有意差は認められなかった。また、NLE5 項目は全て、メンタルヘルスと有意な関連が認められた ($p < 0.01$)。

高齢期の NLE のうち、外出頻度の低下に影響していたのは自身の病気やけがだけであったが、いずれもメンタルヘルスへの影響が認められた。抑うつ状態やうつ病などの精神障害との関連も含めて、NLE を経験した高齢者の心理的支援や、閉じこもり予防の支援が重要と考えられる。

2) 2 年後の閉じこもり発生率は、男性 10.1%、女性 17.1% で男女差があった ($p < 0.01$)。多重ロジスティック回帰分析の結果、2 年後の閉じこもり発生の予測因子として有意であったのは「抑うつ傾向」のみであり、性・年齢を調整したオッズ比は、抑うつ傾向あり (vs. なし) 3.37 (95%信頼区間 1.62-7.01) であった。NLE5 項目は全て 2 年後の閉じこもり発生とは有意な関連が認められなかった。抑うつ傾向の高齢者は閉じこもりになりやすく、予測因子であることが示唆されたが、高齢期の NLE については今回の調査分析では関連がみられなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Sachiko Yamazaki, Koji Fujita, Hiromi Imuta	4. 巻 21(2)
2. 論文標題 Prevalence and Related Factors in Homebound and Semi-homebound Older adults in Rural Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Geriatrics Gerontology International	6. 最初と最後の頁 238-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.14111	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤田 幸司, 山崎 幸子, 蘭牟田 洋美
2. 発表標題 高齢期におけるネガティブ・ライフイベントのメンタルヘルス及び外出頻度との関連
3. 学会等名 日本老年社会科学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎幸子, 蘭牟田洋美, 藤田幸司
2. 発表標題 閉じこもり高齢者の外出阻害要因 外出に対する心理的バリアの抽出
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蘭牟田洋美, 山崎幸子, 藤田幸司
2. 発表標題 閉じこもり高齢者の外出阻害要因 秋田A町の社会環境阻害要因の解明と支援
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤田幸司, 山崎幸子, 蘭牟田洋美
2. 発表標題 高齢期におけるネガティブ・ライフイベントのメンタルヘルス及び外出頻度との関連
3. 学会等名 日本老年社会科学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 幸司, Yong Roseline, 金子 善博, 佐々木 久長, 播摩 優子, 松永 博子, 烏帽子田 彰, 本橋 豊
2. 発表標題 多世代参加コミュニティ・エンパワメントの実践による地域づくり型自殺対策の効果
3. 学会等名 第76回 日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 幸子 (YAMAZAKI SACHIKO) (10550840)	文京学院大学・人間学部・准教授 (32413)	
研究分担者	蘭牟田 洋美 (IMUTA HIROMI) (60250916)	東京都立大学・人間健康科学研究科・准教授 (22604)	
研究分担者	藤原 佳典 (FUJIWARA YOSHINORI) (50332367)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長 (82674)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------